澎湖群島・金門島発見の肥前磁器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 盧, 泰康, 野上, 建紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17021

澎湖群島・金門島発見の肥前磁器

Hizen Ware Found in Kinmen and Pescadores

盧 泰康（国立台南芸術大学）・野上 建紀（有田町歴史民俗資料館）

Lu,Tai-kang (National Tainan University of the Arts) and Nogami,Takenori (Arita History and Folklore Museum)

１．はじめに

17 世紀初めに日本で初めての磁器の生産が始まった。生産当初は日本国内においても中国磁器の輸入を補う程度の生産であったが、1630 年代頃より佐賀県の有田や長崎県の波佐見では豊富な地元原料を背景に磁器の専業化を始めた。そして、17 世紀中頃には海外輸出も始まり、17 世紀後半の大量輸出時代を迎える。この大量輸出の背景にあったのは、明から清への王朝交替に伴う中国国内の混乱であり、清朝による海禁政策であった。

そして、肥前磁器の輸出に大きな役割を果たした海商が清朝に抵抗を続けた明の遺臣鄭氏一派であった。今回はその鄭氏一派が本拠地とした海域、すなわち台湾海峡及びその周辺に位置する澎湖群島、金門島で発見された肥前磁器を紹介する。そして、台湾海峡周辺における陶磁器貿易について討論を行いたいと思う。

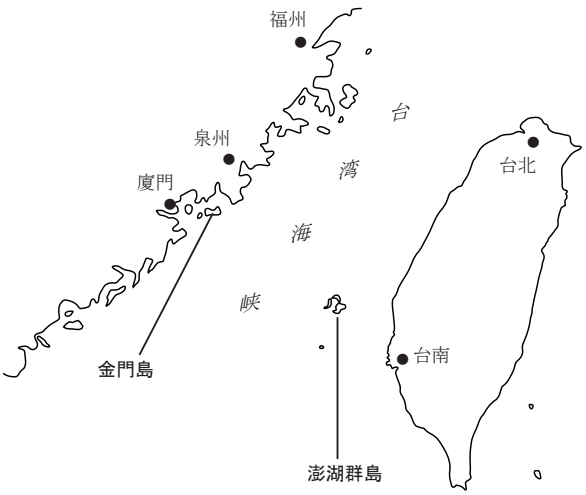
２．澎湖群島馬公港発見の肥前磁器

澎湖群島は台湾海峡の東南方に位置する。中国福建地方の東、台湾の西方にあたり、古くから東アジア沿海航路の要衝であった。そして、馬公港は澎湖内海、澎湖本島の西側の馬公湾内に位置する。2005 年 4 月中旬、馬公港の水底の浚渫作業が行われ、さらった海底の堆積物の中に宋元時代から近代に至るまでの大量の陶磁器が発見された。その中に 17 世紀後半に属する肥前の染付磁器が含まれていた。以下、それらについて個別に述べる。

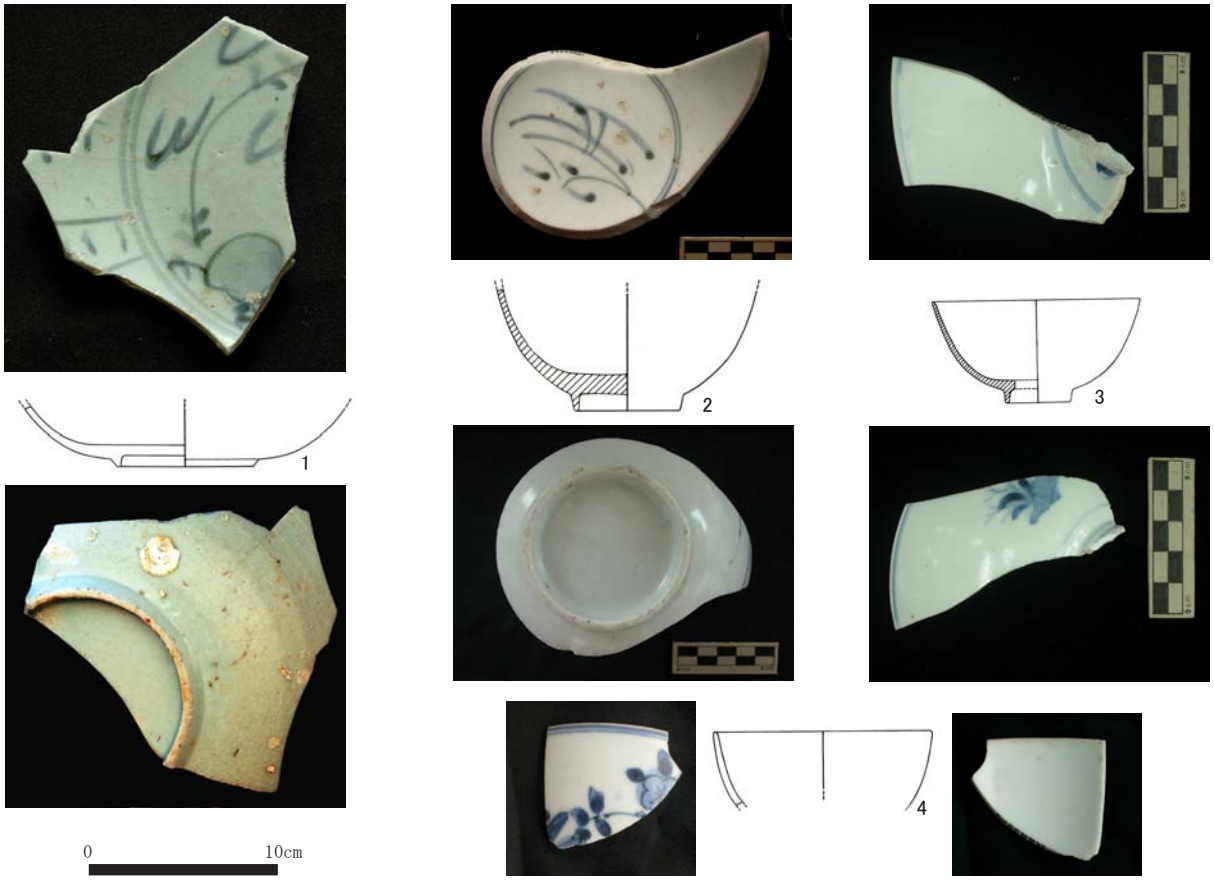
①染付芙蓉手皿，標本番号 MGG0150

復元後の高台径 7㎝、表面は灰色がかった青みをおびた透明釉がかかっている。高台は浅くて薄い。見込みには草花文が入り、内側面には放射状に区画した文様が入れられている。生産年代は 1650 ー 1670 年代である。有田の外尾山窯や嬉野の吉田窯など外山の窯場に類例が見られる。海外の消費地遺跡ではインドネシアのパサールイカン遺跡 (1)、フィリピンのマニラ・イントラムロス遺跡の出土遺物 (2) などに類例が見られる。

第１図　肥前地図



第２図　澎湖群島・金門島位置図



第３図　澎湖群島馬公港発見の肥前磁器

②染付雲龍見込み荒磯文碗，標本番号 MGG0505

復元高台径 5.6cm。器形は丸碗であり、高台は細く、真っ直ぐ立ち上がっている。染付の発色は灰色がかった藍色であり、外面には雲龍文の脚部が見られる。見込みが完全に残っており、いわゆる荒磯文（波濤文）が入れられている。生産年代は 1660 ー 1680 年代頃である。波佐見や有田周辺の窯場で生産されたもので、台湾の台南社内遺跡の出土品に類似する[3]。その他､ベトナム中部のホイアン遺跡[4]やタイのアユタヤ付近のチャオプラヤ川から採集された遺物[5]に類例が見られる。

③染付草花文碗・坏，標本番号 MGG151、MGG502

器形は丸碗である。口部は直行する。外面や見込みなどに草花文が入る。1650 ー 1670 年代に有田などで生産されたものである。

３．明末鄭氏時代の澎湖群島と陶磁器中継貿易

1662 年、鄭成功は台湾のオランダ人を駆逐し、ここを清朝に抵抗する主要な拠点とした。17 世紀中頃以後、清朝政府が鄭氏の資金源を絶つことを目的に中国沿海における海禁と遷界政策を実施したことにより、沿海の海上貿易は極めて大きな影響を受けたが、それでも台湾の鄭氏が積極的に海外貿易に従事したことが記録にも見られる。:

> 別遣商船前往各港，多價購船料，載到臺灣，興造洋船，鳥船，裝白糖、鹿皮等物，上通日本；製造銅熕、倭刀、盔甲，並鑄永曆錢，下販暹羅、交趾、東京各處以富國，從此臺灣日盛，田疇市肆不讓内地[6]。

鄭氏の対外貿易の各種商品の内、陶磁器も重要な貿易品であった。台湾から出土する貿易陶磁や関連史料によって、台湾の鄭氏は一時期、中国沿海で陶磁器の密貿易を行うだけでなく、中国陶磁器以外の陶磁器（主に肥前磁器 ）の中継貿易も行っていた[7]。台湾海峡の東南に位置する澎湖諸島の海上船舶交通や軍事上の重要性は説明するまでもあるまい。永暦十八年（1664）三月、鄭成功の子鄭経が、中国沿海の各島を全面放棄し､台湾に退避する途上、将校の忠振伯や洪旭に澎湖諸島の実地踏査をさせて

写真１　外尾山窯跡出土染付芙蓉手皿

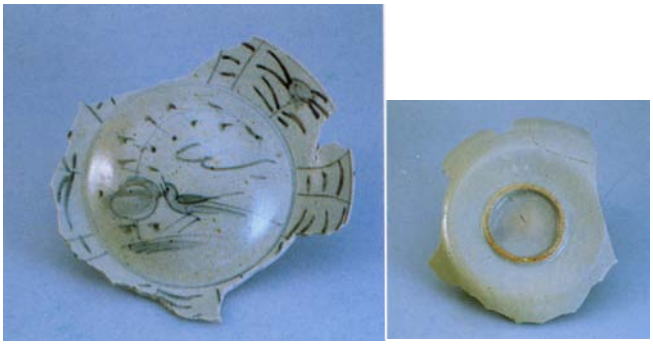


写真２　吉田２号窯跡出土染付芙蓉手皿
（佐賀県立九州陶磁文化館 1990）

写真３　広瀬向窯跡出土染付芙蓉手皿

写真４　多々良の元窯跡出土染付芙蓉手皿

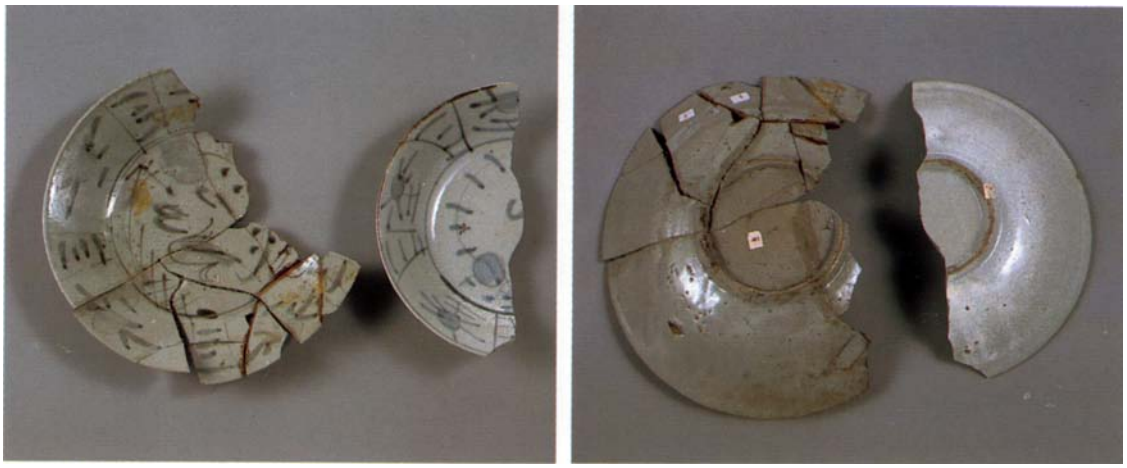
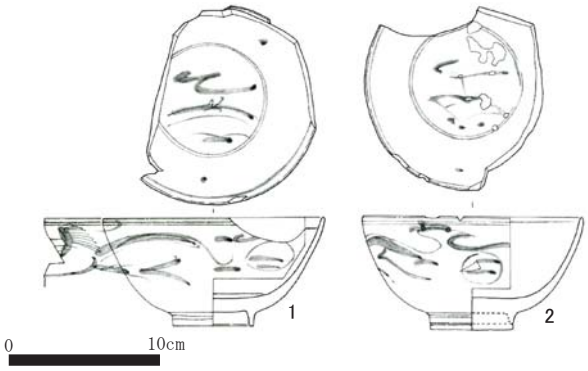


写真５　パサリカン遺跡出土染付芙蓉手皿（佐賀県立九州陶磁文化館 1990）

写真６　イントラムロス出土染付芙蓉手皿（Courtesy:National Museum of the Philippines）



第４図　永尾高麗窯跡出土染付雲竜見込み荒磯文碗（波佐見町教育委員会 1994）

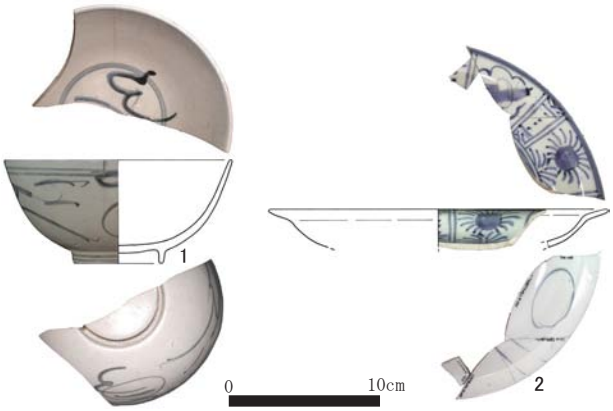
いる。以下は洪旭の報告である。:

（洪）旭曰:澎湖乃臺灣門戸，上至浙江、遼東、日本，下通廣東、交趾、暹羅必由之路，當設重鎮，不可苟且。倘被占踞，則臺灣難以措手足。鄭經是之，就媽祖宮（現在の馬公）設立營壘，左右峙中置煙墩、砲臺……。[8]

この他、明末鄭氏時代の絵図〈永暦十八年臺灣軍備圖〉の中には、澎湖の馬公湾内に「天妃宮前好抛船」の一語[9]が付されている。当時の鄭氏の船舶の海上航運にとっての馬公湾の重要性を示している。明末鄭氏時代の史料に見られる澎湖群島の状況に関する記録の大多数は軍事防衛や海戦に関するものであり、貿易状況に関するものはほとんどみない。馬公港の海底から引き揚げられた陶磁器の内、明末鄭氏時代あるいは 17 世紀後半に属する陶磁器の量は非常に多く、当時の馬公港付近海域における海上貿易の具体的な状況を反映している。肥前磁器以外に馬公港から引き揚げられた 17 世紀後半の陶磁器を見ると、福建地方で生産された製品が少なくなく、江西省景徳鎮の貿易陶磁も含まれている。これらの製品は澎湖諸島の陸上の遺跡では台湾本島と同様に少なく、このことは馬公港が鄭氏の海上貿易ネットワークの中で経由地としての一定の役割を担っていたことを示している。

馬公港で発見された肥前磁器はいずれも 1650 ー 1680 年代に属するものであり、染付見込み荒磯文碗などは台湾の台南新市社内遺跡で発見された遺物に類似している。その他、台湾南部で肥前磁器が発見されている遺跡は台南安平のゼーランディア城跡、台南市区明鄭墓葬、高雄鳳山舊城遺跡などがあり、馬公港発見の肥前磁器と類似した製品はインドネシア、フィリピン、ベトナム、タイなど東南アジア地域で見られる。

写真７　チャオプラヤ川引き揚げ染付雲竜見込み荒磯文碗（佐賀県立九州陶磁文化館 1990）



第５図　台湾・台南社内遺跡出土肥前磁器

これらのことから澎湖諸島の馬公港海域は鄭氏の肥前陶磁貿易の経由地であったことがわかる。澎湖諸島は台湾海峡の海上交通の要衝に位置しており、毎年の季節風を利用した日本や東南アジアに向かう鄭氏の貿易船は、天候状況、積荷の転載、船への補給等の理由により馬公港に暫く停泊し、再び目的地

に向けて出港することができた。そのため、澎湖諸島は鄭氏の海上貿易ネットワークの重要な結節点であったのである。

４．金門島と廈門における肥前陶磁貿易

金門島（旧名浯洲または浯嶼）は福建省東南部の九龍江口の廈門湾内に位置し、廈門島と近接している。その位置は大陸部では漳州、廈門を、海外では澎湖、台湾を抑える要衝である。これまでに金門島で出土した陶磁器資料は多くないが、近年、金門地方の地元研究者の林金榮氏が現地で陶磁器を採集している。氏が採集した陶磁器の中には肥前の染付芙蓉手皿[(10)]がある。肥前の染付芙蓉手皿は台湾南部の社内遺跡、インドネシア、フィリピンのマニラ、遠くはアメリカ大陸のメキシコでも出土している[(11)]。

今回、初めて発見された金門島の肥前の染付芙蓉手皿は 1650-1663 年、1666-1680 年の時期に鄭氏一派が金門島や廈門地区で盛んに肥前磁器の中継貿易を行っていたことを示す重要な証拠となるものである。

1646 年，鄭成功は清朝に抗するために金門島の烈嶼において挙兵した。これより後、金門島と廈門島の両島は鄭成功にとっていわゆる反清復明の重要な拠点となった。その内、廈門（思明州）は軍事と貿易活動の中枢を担っていた。そして、廈門に近接する外洋の金門島は、鄭氏の貿易船にとって日本や東南アジアの各港市との重要な航路の起点であっただけでなく、鄭氏は財政や経理の役人である鄭泰を金門島に駐留させてその管理を行った。

鄭成功は父鄭芝龍が有していた海外貿易における勢力を手にして、資金を供出して大規模な武装を行い、清朝への抵抗活動を行った。オランダ連合東インド会社の記録にも見られるように鄭氏に属する商船の対日貿易には日本の陶磁器の中継貿易があることは明らかである。：

> 1658 年 11 月 5 日から 8 日までに長崎を出帆した７艘の唐船は大量の各種粗製磁器を積んで廈門へ回航した。同年 11 月 18 日に中国に向けて出航した２艘の積荷はほとんどが粗銅と磁器であった。同月 20 日から 28 日までに中国に向けて出航した６艘の積荷もほとんどが粗製の磁器で、他は狐とアナグマの生皮であった[(12)]。

写真８　金門島採集染付磁器（上側の芙蓉手皿が肥前）
（林金榮 2006 より転載）

写真９　イントラムロス出土染付芙蓉手皿
(Courtesy:National Museum of the Philippines)

前述した唐船の帰航の出帆と帰帆の時期に従って、1658 年 1 月 6 日のオランダ連合東インド会社の資料を合わせて見ると、これらの船の大多数は鄭成功の本拠地である安海から来航したものであり、その他の東南アジアの港から来航した船もまた全て

大貿易家国姓爺とその与党に属する船であった[13]。

前述した日本磁器の中国沿岸への大量輸出について、オランダのT. Volkerは次のように見ている。「最初の大量の粗製の日本磁器が、中国沿岸の最大の粗製陶磁器積出港の一つである廈門に輸出されたということはきわめて注目すべきことであって、このことは中国国内の陶磁器市場に空白が生じたことによって日本磁器の輸入が行われたのではないかという考え方が生じてくる。理論上はありうることであるが、実態にはそぐわない。というのは中国商人がなお粗製磁器を輸出していたからである。廈門の商人にとって日本磁器は中国国内の市場を目的としたものではなく、海外輸出するために輸入していた可能性が考えられる[14]。」

廈門における鄭氏の日本磁器の貿易のあり方はまさにT. Volkerが述べるとおりである。実際、同年末の12月14日，インドネシア・バタヴィアのオランダ東インド会社の記録には廈門より２艘の中国ジャンク船が日本の銅、粗製の磁器などの積荷を積んで入港しており、鄭成功の手紙を携えていた[15]。積荷のいわゆる「粗製の磁器」は鄭氏が東南アジアに中継貿易した肥前磁器であろう。

この他、スペイン植民地のマニラもまた鄭氏は肥前磁器の貿易の対象としていた。1662年以前は鄭成功がまだ台湾を占領していないため、安海、廈門が鄭氏の貿易の主要な本拠地であった。そのため、初期の肥前磁器貿易においては「長崎－廈門、安海－マニラ」の貿易ルートが機能していた可能性がある[16]。

1660年代初、金門島，廈門で行われていた鄭氏による肥前陶磁の中継貿易に大きな変化が生じた。まず1662年5月に鄭成功が台湾にて死去した。1663年以後、清朝の大軍とオランダ艦隊の攻撃により金門島，廈門は陥落し、沿海の戦局は緊迫した。1664年初には鄭成功の後継者の鄭経が銅山（東山島）を離れ、軍を率いて台湾に退いた。鄭氏一派は大陸側の領地を全て失い、沿海での海上貿易は一時頓挫した。

1666年9月，鄭氏による金門島，廈門の貿易活動は数年間、沈滞した後、再び回復の勢いをみせた。まず鄭経は清朝による台湾の貿易封鎖を破るために部将江勝を派遣した。江勝は水軍を率いて廈門に進駐し、内陸と通じて沿海で密貿易を行った。：

勝踞廈門，斬茅為市；禁止擄掠，平價交易，凡沿海内地窮民，乗夜竊
負物入界，雖兒童無欺，自是，内外相安，邊疆無釁，其達濠貨物，聚
而流通台灣，因此而物價平，洋販愈興[17]。

1674年（永曆二十八年，康熙十三年）になり，鄭経は台湾より渡り、金門島と廈門を奪回した。鄭経は廈門で「訓練士卒，修整舟師，又差兵都事李德，駕船往日本，鑄永曆錢，並銅煩、倭刀器械，以資兵用。」[18]といった指令を行っている。そして、廈門は再び貿易が盛んな土地となり、『閩海紀要』には当時の廈門の状況が記載されている。：

先是廈門為諸洋利藪，癸卯（1663）破之，番船不至。至是，英圭黎及萬丹、暹邏、安南諸國貢物於經，求互市，許之；島上人烟，輻輳如前[19]。

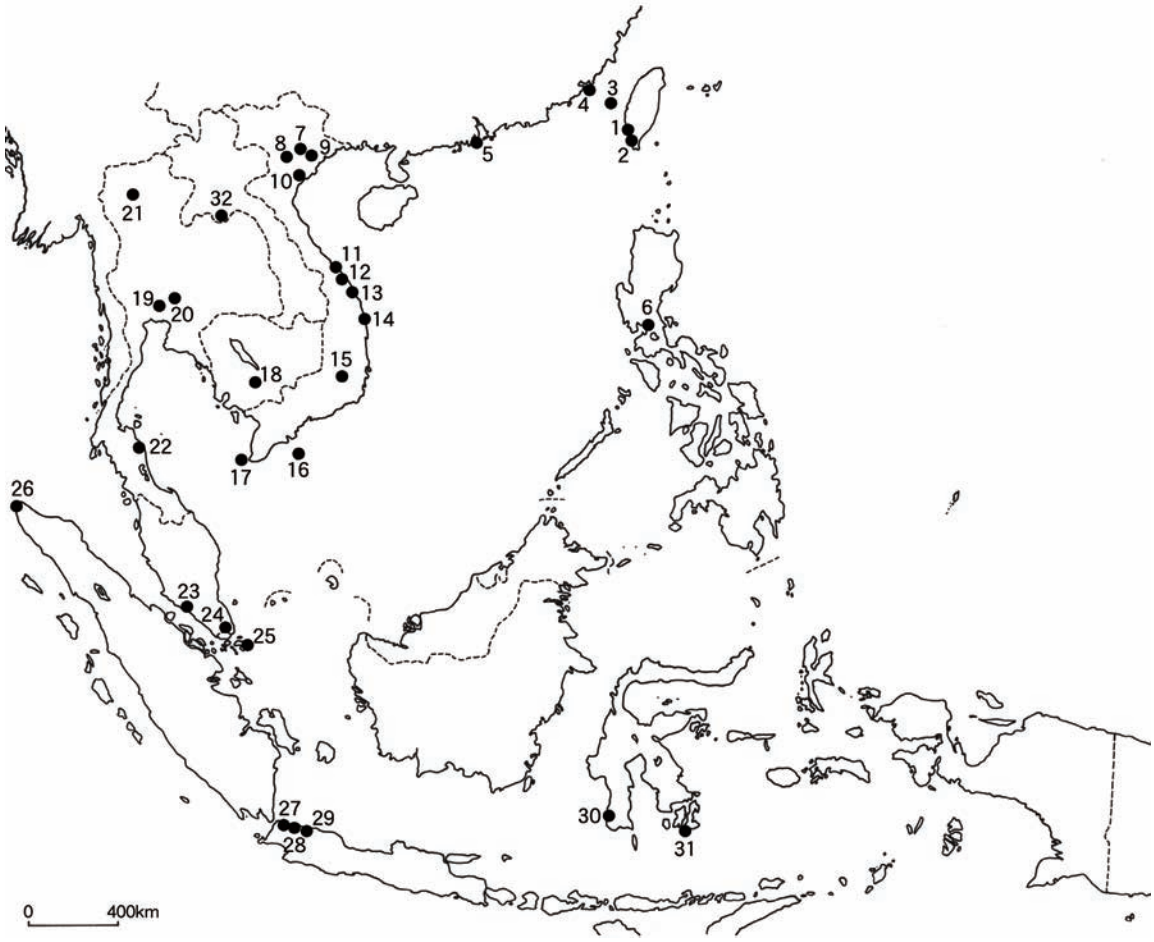
イギリス東インド会社は廈門に商館を設立し、1677年イギリス船Bantam Pink号は廈門からインドネシアのバンテンまで粗製磁器を運んだ[20]。この「粗製磁器」は鄭氏が密輸した福建地方の粗製磁器を指す可能性が高いが、日本の肥前の粗製磁器も含まれていた可能性もある。鄭氏が廈門で中継した日本磁器は、その所属の商船で東南アジアへ販売するだけでなく、イギリス東インド会社を通じて、インドのマドラスや遠くはヨーロッパ本国のロンドンにまで輸出された可能性がある[21]。例えば1681年8月12日、ロンドンの会社の管理者は廈門の商館に向けて、2000元（dollars）相当の価値のある日本の屏風、中国磁器（chinaware）やその他の珍しい商品を買い付けるように指示を送っている[22]。

1680年に至り、鄭経は中国内陸の戦闘で敗北を重ね、金門島，廈門も陥落して、再び台湾に退却せざるをえなくなった。鄭氏による十数年の長期にわたる二度目の廈門における貿易活動も終焉を迎えた。

５．南シナ海周辺の肥前陶磁の交易ルート

東南アジア、東アジア各地での発掘調査の増加により、肥前陶磁の出土例も増加し、その交易の実態が明らかになりつつある。

そこで南シナ海周辺、特に台湾海峡を中心とした



1 Tainan 台南 , Taiwan	9 Hai Hu'ng	17 Kien Giang	25 *The Geldermalsen*
2 Kaohsiung 高雄	10 Thanh Hoa	18 Ôdôngk, Cambodia	26 Gien site, Sumatra
3 Pescadores 澎湖諸島	11 Quang Tri	19 Ayutthaya, Thailand	27 Banten Lama, Jawa
4 Kinmen 金門	12 Huê	20 Lop Buri site	28 Tirtayasa site
5 Monte Fortess site, Macao	13 Hôi An	21 Chiang Mai	29 Batavia
6 Intramuros, Manila	14 Bin Dinh	22 Nakhon Si Thammarat	30 Benteng Somba Opu site, Sulawesi
7 Ha nôi, Vietnam	15 Lâm Dông	23 Melaka, Malaysia	31 Benteng Wolio site, Buton
8 Ho'a Binh	16 Côn Dao	24 Kota Tinggi	32 Vientiane, Laos

第６図　東アジア・東南アジアにおける肥前陶磁の出土分布図

海域周辺で発見されている肥前磁器からその交易ルートを考えたい。ここでは 1640 年代から 18 世紀前半にかけて、5 期に分けて見ていくことにする。

［1 期］1640 年代後半ー 1650 年代前半

肥前磁器の輸出開始時期である。確実にこの時期に相当する肥前磁器はまだ台湾海峡周辺では確認されていない。また、台湾海峡に最も近い磁器市場の一つであるマニラでもまだ確認されていない。

一方、文献史料をみると、1650 年代にはオランダ船が台湾のタイワン商館へ医療用の薬壷や薬瓶を運んでいる。例えば 1652 年 10 月 31 日、長崎発タイワン行きコーニング・ファン・ポーレン号の送り状には「1265 個　大小の薬壷　2 箱に梱包　合計金額　41.-.-テール　f. 116. 17.」[23] と記されている他、1653 年 11 月 11 日、長崎発タイワン経由バタヴィア行ヴィッテ・ファルク号の送り状，1654 年 10 月 25 日、長崎発タイワン経由バタヴィア行きブレダ号の送り状，1654 年 10 月 31 日、長崎発タイワン経由バタヴィア行きカルフ号の送り状にも各種の医療用薬壷や薬瓶が記されている [24]。今後、これらの薬壷や薬瓶がタイワンで発見される可能性

は高い。

［２期］1650 ～ 1660 年代

1656 年の海禁令の公布から 1663 年頃に鄭氏一派が台湾に本拠を移すまでの時期である。海禁令の公布により肥前磁器の海外輸出は本格化する。輸出の主な担い手は鄭成功一派である。1650 年代末には彼らの本拠地であった廈門，金門島，安海などに向けて長崎から肥前磁器を積んで出帆した。それらの港市を中継して、マニラやバタヴィアなど東南アジアの諸都市へと運ばれていった。

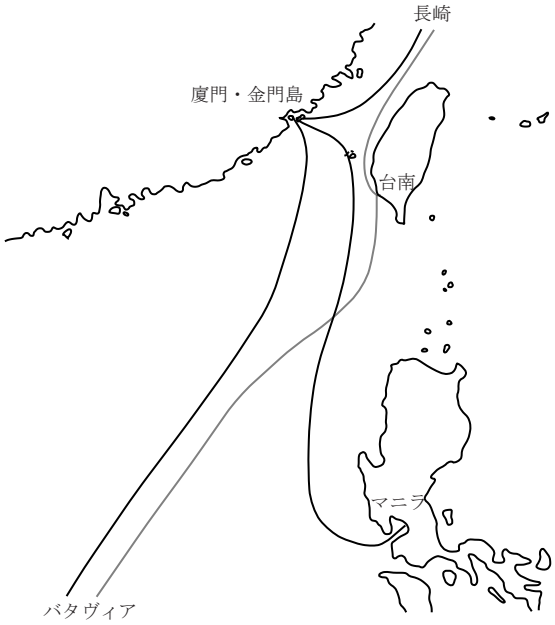
そのため、以前より廈門周辺で当該時期の肥前磁器が発見されることを予想していたが [25]、今回、金門島で発見された染付芙蓉手皿がこの時期に該当する可能性が高い。類似した内側面文様をもつ染付芙蓉手皿が有田の外尾山 4 号窯跡から出土している。同じ土層からは 1659 年にスリランカのゴールで沈んだオランダ船 The Avondster 号で発見された染付芙蓉手皿と同じ見込み文様が描かれている製品が多数出土している。The Avondster 号は 1656 年に長崎に来航しており、いわゆるアルバレロとよばれる薬用壷が回収されている。1656 年 11 月 2 日の同船の長崎発バタヴィア行きの送り状には「2136 個　外科治療所向け磁器の壷　合計 99.6.2 テール　f.283.18.5」とあり [26]、回収されたアルバレロはその一部である可能性があり、染付芙蓉手皿もアルバレロと同様に長崎来航時に入手した可能性がある。

一方、金門島発見の染付芙蓉手皿と類似した内側面文様をもつ製品がマニラでも出土しており、これも同時期の製品と推定される。この時期にマニラに輸入された肥前磁器は主に金門島，廈門を経由したものと推定している。すなわち、「長崎–金門島，廈門，安海–マニラ」ルートである。

澎湖群島の馬公港から出土した粗雑な染付芙蓉手皿も２期あるいは次の３期の早い段階のものである。同種の染付芙蓉手皿が最も多く確認されている東南アジアの都市はバタヴィアやマニラである。特にマニラでは最も多く確認される肥前磁器の種類の一つである。

［３期］1660 ～ 1680 年代

鄭氏一派が台湾のオランダ勢力を駆逐し、本拠を置いてから、1683 年に降伏するまでの時期である。



第７図　主な肥前磁器交易ルート（1650 ～ 1660 年代）

この間、鄭経は 1666 年に廈門に進駐し、密貿易を行い、1674 年には金門島，廈門を奪回している。

澎湖群島や台南社内遺跡で発見されている染付見込み荒磯文碗などはこの時期に該当する。台南社内遺跡で発見されている染付芙蓉手皿もこの時期の製品である。同時期の製品はマニラでも多数発見されており、マニラとガレオン貿易で結ばれていたメキシコでも出土している。マニラで発見されている肥前磁器の多くは主に台湾を経由してもたらされたものであろう。

この時期、台湾からマニラへ多くの陶磁器が輸入されていることは文献記録にも残されている。1660 ～ 1680 年代の台湾・マニラ間の具体的な貿易内容などについて、方真真はスペイン・セルビアの Archivo General de Indias にある税関記録（Testimonio a la letra de todos los registros de visitas de champanes y pataches que han venido al comercio de estas islas desde el año de 1657 hasta el de 1684,que llegó a gouernar estas islas el señor Almirante de galeones,D.Gabriel de Curuzelaegui y Arriola,cauallero del orden de Sanctiago. Quaderno 2,que llama al tercero）の調査を行い、その成果を発表している [27]。記録は 1657 年から 1684 年の間のフィリピン群島の貿易に関するものであるが、方真真はその中でも台湾に関わりのある部分を分析している。以下にその論文の内容を引用する。台湾の大員（現在の台南安平）からマニラへ至った商船の記録の初見は 1664 年である。そして、1684

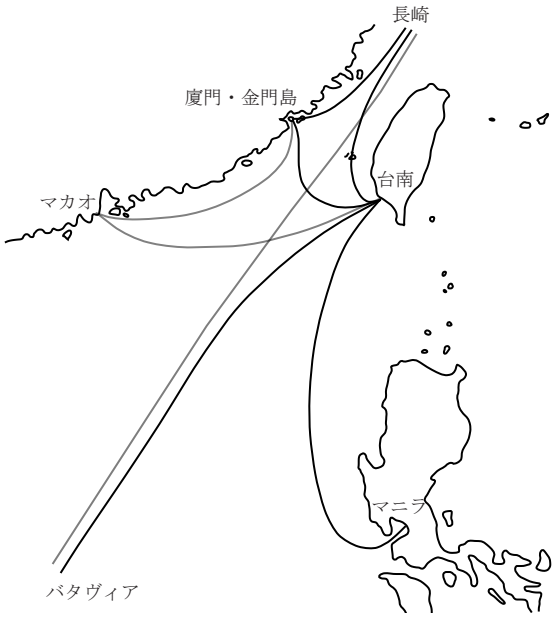
年までの 20 年間に 51 艘の船が台湾からマニラへ至っている。主要な目的は商業貿易である。長崎−台湾−マニラ、あるいは中国−台湾−マニラの三角貿易を行っていることがわかる。清朝による海禁令下には台湾が肥前磁器貿易のみならず、ガレオン貿易そのものにとって重要な役割を担っていたと考えられる。

マニラに輸入された商品の内容も興味深いものである。日本の商品が数多く含まれている。特に銅、鉄などの金属は日本がその主要な産地であった。そして、陶磁器に関する記載も多く見られる。例えば 1681 年 1 月 8 日にマニラが輸入した商品の中には精緻な大皿（盤子）160 梱（毎梱 30 個）、小碗 75 梱（毎梱 100 個）が含まれている [28]。その他、以下の記録も見られ、日本の皿類もマニラへ運ばれていることがわかる [29]。

1665 年 4 月 18 日　茶壺
1666 年 4 月 2 日　日本製大皿（盤子）
1668 年 4 月 5 日　大皿
1672 年 4 月 19 日　碗
1682 年 4 月 15 日　大碗 20 梱
1683 年 4 月 11 日　精緻な大皿 60 梱（毎梱 30 個）
1684 年 1 月 31 日　碗 10 桶（毎桶 50 個）
1684 年 3 月 4 日　盛湯用 100 梱（毎梱 20 個）

また、日本から台湾を経由してマニラに至る 1671 年、1683 年、1684 年の 5 艘の商船にも多くの商品が積載されていた。すなわち、「銅、綿花、釘子、生鉄、飼料、松木厚板、松木、木棍、木排、大皿、碗、鍋（後略）」[30] などである。この大皿、碗なども肥前磁器である可能性が高い。器種のみの記載であるため、具体的な製品の種類は明らかではないが、「日本製大皿」とあるのはマニラで出土する染付芙蓉手皿などが該当すると推測される。

その他、鄭氏一派の本拠地であった台湾だけでなく、中国の大陸側の交易都市を経由してマニラへ流入した可能性もある。前述したように 1666 年から 1680 年の間、鄭氏一派は再び金門島，廈門で貿易活動を行っている。さらにフォルカーによる『磁器とオランダ連合東インド会社』には、1673 年の記載として、「マカオに近いランパコ（ランパカオ）で彼ら自身の自衛のもとで多数のオランダの自由船と中国のジャンク船が碇をおろし、かれらは広東から来る中国系タタール人と取引している。」とある [31]。マカオのモンテフォルテス Monte Fortess 遺跡出土遺物の中にも 17 世紀後半代の肥前磁器片が数点発見されており [32]、マカオ水域で取引されていた商品の中に肥前磁器が含まれていた可能性も考えられる。



第８図　主な肥前磁器交易ルート（1660 〜 1680 年代）

［４期］1680 〜 1700 年代

1683 年に鄭氏が降伏し、翌 1684 年には展海令が公布された。次いで翌 1685 年に広東、廈門、舟山、福建等を諸外国の船舶に開放する外国貿易公許の法令を発している [33]。展海令の公布以後、中国磁器の輸出が本格化する。唐船による肥前磁器の輸出は量を減退させながらも続いたが、それまで肥前陶磁の重要な中継地であった台湾は 1685 年以後の政治や海上貿易の環境の変化によって、その陶磁貿易の中継地としての地位を失っていった [34]。これまで明らかになっている貿易陶磁資料をみても台湾海峡周辺ではまだこの時期の肥前磁器は確認されていない。一方、マニラでは数点発見されている。広東、福建（廈門）、浙江等の港市を経由してもたらされたものであろう。

［５期］1700 〜 1740 年代

1715 年ごろから諸外国船は広東の黄埔に入港碇泊している [35]。イギリス船は、展海令公布直後の 17 世紀の終わり頃には廈門、寧波、舟山などで取

引したが、1716 年からは専ら広東に来航している[36]。台湾海峡周辺の中継地としての地位は相対的に低下している。そして、この時期においても唐船による肥前磁器の輸出は続いている。『唐蛮貨物帳』によれば 1711 年においても唐船は長崎から 1339 俵と 1950 個を輸出し、そのうちの 1187 俵をバタヴィアに運んでいる[37]。また 1717 年から 1723 年まで清朝は再度の海禁を行っており、この間、唐船が毎年多量の肥前磁器、特に「受皿付茶碗」thee goet をマカオ・広東に輸出した[38]。「受皿付茶碗」とはコーヒーカップやティーカップを指すものと思われる。オランダ船も盛んに長崎から積み出しており、オランダのアムステルダムでも数多く出土する[39]。

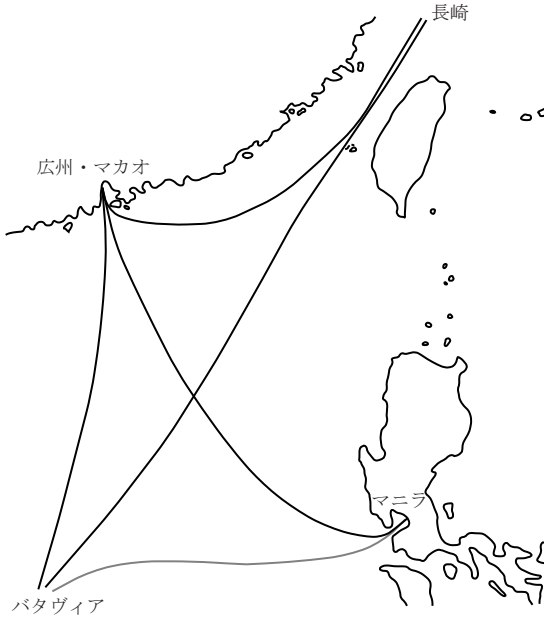
一方、これまでマニラ、マカオではこの時期の肥前磁器はまだ発見されていない。しかし、マニラとガレオン貿易で結ばれていたアメリカ大陸のメキシコでこの時期の肥前の色絵磁器（染錦）が発見されているため、マニラでも今後、発見される可能性は高い。この場合のマニラへの流入経路は「長崎–広東・マカオ–マニラ」ルートあるいは「長崎–バタヴィア–マニラ」ルートのいずれかであろう。

６．結語

文献史料に見られる記録や近年各地で出土している肥前磁器の研究により、17 世紀後半の鄭氏一派による肥前陶磁の中継貿易の実態が明らかになってきている。近年、澎湖諸島や金門島で発見された肥前磁器は、肥前陶磁の貿易ネットワークに関する情報を提示するだけでなく、鄭氏による陶磁器貿易の変遷や貿易ルートにおいても重要な参考資料となるものである。

一方、金門島と一衣帯水の位置にある廈門地区が、鄭氏による肥前陶磁貿易の重要拠点であることは史料により知ることができるが、これまで廈門地区における肥前陶磁の出土例はまだない。今後の調査研究を待たなければならない。

鄭氏一派が肥前陶磁の海外輸出に大きな役割を果たしたことは疑いない。その鄭氏一派の貿易活動を明らかにするためには、肥前陶磁だけでなく、同時代の中国磁器の流通のあり方を知ることもまた重要である。中国磁器と肥前磁器の流通を比較することで、当時の海上交易ネットワークのより具体的な復元が可能になるであろう。（2008 年 3 月 15 日脱稿）



第９図　主な肥前磁器交易ルート（1700 〜 1740 年代）

最後に本稿の執筆分担を記しておく。「２．澎湖群島馬公港発見の肥前磁器」、「３．明末鄭氏時代の澎湖群島と陶磁器中継貿易」、「４．金門島と廈門における肥前陶磁貿易」は盧が主に執筆し、「１．はじめに」と「５．南シナ海周辺の肥前陶磁の交易ルート」は野上が主に執筆し、「６．結語」は共著した。盧の担当分の原文は中国語であり、2008 年 2 月に野上が日本語翻訳を行った。その上で討論を重ねながら加筆修正を行い、同年 3 月に脱稿した。そして、同論文の中国語版「澎湖馬公港與金門發現的肥前瓷器」は、すでに『史物論壇』第六期　國立歴史博物館 2008（台湾・台北）で掲載している。

註

（１）大橋康二 1990『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館：p.97

（２）野上建紀 2005「ガレオン貿易と肥前磁器ーマニラ周辺海域に展開した唐船の活動とともに」,『上智アジア学』第 23 号：p.244、fig. 12、fig. 14。

（３）野上建紀、李匡悌、盧泰康、洪曉純 2005「台南出土の肥前磁器ー 17 世紀における海上交易に関する考察ー」『金大考古』No. 48：pp.6-10

（４）菊池誠一編 1997『ベトナム日本町ホイアンの考古学調査』昭和女子大学国際文化研究紀要 Vol. 4：p.43、図 23。

（５）大橋康二 1990「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館：pp.158-160、図 362-371

（６）（清）江日昇 1984『臺灣外記』台北：臺灣大通書局：p.237
（７）盧泰康 2006『十七世紀臺灣外來陶瓷研究－透過陶瓷探索明末清初的臺灣』台南：國立成功大學歷史學研究所博士論文（未出版）：pp.212-246
（８）（清）江日昇 1984『臺灣外記』台北：臺灣大通書局：p.231
（９）陳漢光、賴永祥 1957『北臺古輿圖集』台北：臺北市文獻會：p.5
（10）林金榮 2006『金門地區使用的陶瓷器文化探源』金門：内政部營建署金門國家公園管理處：p.64、図 4-6。
（11）野上建紀・Eladio Terreros・George Kuwayama・José Álvaro Barrera・Alicia Islas Domínguez・田中和彦 2006「太平洋を渡った陶磁器－メキシコ発見肥前磁器を中心に」『水中考古学研究』第 2 号：pp.88-105
（12）T. Volker, Porcelain and The Dutch East India Company (Leiden, Holland: E. J. Brill, 1971,) p. 128
山脇悌二郎 1988「貿易篇−唐･蘭船の伊万里焼輸出」『有田町史』商業編Ⅰ：p.276
（13）程紹剛 2000『荷蘭人在福爾摩沙』台北：聯經出版社：p.491
（14）T. Volker, Porcelain and The Dutch East India Company, p.128
（15）註（13）の p.511
（16）註（２）の pp.249-250
（17）註（８）の巻之六、p.239
（18）註（８）の巻之六，p.267
（19）（清）夏琳 1984『閩海紀要』台北：臺灣大通書局：p.48
（20）註（14）の pp.214-215.
（21）坂井隆 2004「肥前磁器（伊萬里）の發展と 17 世紀後半のアジア陶磁貿易出土資料」『田野考古』九巻一、二期：p.13
坂井隆 1997「台湾のイマリー十七世紀後半の交易拠点」『陶説』第 533 号：p.33
（22）Chang Hsiu-Jung, Anthony Farrington, Huang Fu-San, Ts’ao Yung-Ho, Wu Mi-Tsa, Cheng His-fu, Ang Ka-In, The English Factory in Taiwan (Taipei: National Taiwan University, 1995,) p. 446
　いわゆる「chinaware」について，坂井隆氏は肥前の倣製品が景徳鎮の製品の代替品であり、当時のイギリス人から見れば、両者の区別はなく、いずれも「磁器 chinaware」であるとする。筆者もまた同様の認識であり、イギリス商人にとって重要であるのは産地ではなく、その品質であったと考える。同上註を参照のこと。
（23）櫻庭美咲 2006「オランダ東インド会社日本商館文書における肥前磁器貿易史料− 1650 ～ 1670 年代の医療製品取引に関する史料研究の再考−」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 16 号：p.38
（24）註（23）の pp.38-40
（25）註（３）の pp.6-10
（26）註（23）の p.41
（27）方真真 2003「明鄭時代台湾與菲律賓的貿易關係 - 以馬尼拉海關紀録為中心」『台湾文献』第 54 巻第 3 期：pp. 59-105。
（28）註（27）の p.81。
（29）註（27）の pp.82,104,105
（30）註（27）の p.85
（31）フォルカー 1979-1984「磁器とオランダ連合東インド会社（1）～（47）」井垣春雄校閲，前田正明、深川栄訳『陶説』第 312 ～ 370 号連載（44）の p.56
（32）野上建紀 2005「澳門出土の肥前磁器」『金大考古』No.50: pp.7-11
（33）山脇悌二郎 1988「貿易篇−唐･蘭船の伊万里焼輸出」『有田町史』商業編Ⅰ：p.360
（34）註（７）の pp.247-248
（35）註（33）
（36）註（33）の p.361
（37）註（33）の p.407
（38）註（33）の p.407
（39）佐賀県立九州陶磁文化館 2000『古伊万里の道』

参考文献

佐賀県立九州陶磁文化館 1990
『海を渡った肥前のやきもの展』
波佐見町教育委員会 1994
『下稗木場窯跡・三股古窯跡・永尾高麗窯跡』波佐見町文化財調査報告書第５集
林金榮 2006
『金門地區使用的陶瓷器文化探源』金門：内政部營建署金
陳信雄・盧泰康 2007
『澎湖馬公港出水文物調査研究計畫期末報告』澎湖：澎湖県文化局
盧泰康 2008
「澎湖所見的肥前瓷器」『金大考古』No.61
盧泰康 2008
「澎湖馬公港與金門發現的肥前瓷器」『史物論壇』第六期 國立歴史博物館（台湾・台北）